

丸山眞男文庫所蔵未発表資料翻刻

吉野源三郎書簡 丸山眞男宛 三六点

竹田 行之・山辺 春彦・金子 元・川口 雄一（編注）

吉野源三郎書簡の翻刻に当たって

丸山文庫には、段ボール二六箱に及ぶ丸山眞男宛の書簡が所蔵されている。現在その調査と整理を進めているが、発信者・受信者等のプライベートを考慮して、関係者の存命中は原則非公開としている。

しかし、調査の過程で、いち早く公開すべき資料があると判断された。その理由の一つは、優れた学者・思想家等からの来簡の中には、丸山の知的交流の拡がりを伝えるだけでなく、丸山が生きた時代を学問的に解明する上で高い史料的价值をもつものがあることである。また二つめの理由として、書簡の中で記されている同時代の出来事について、できるだけ当時の事情を知る者が解説や補注を付し、後世に遺すことが望ましいと思われたことが挙げられる。

以上のような事情から、公開の望まれる書簡資料の一つとして、この度、吉野源三郎書簡三六点を翻刻することとした。掲載を許可して下さった著作権継承者の吉野源太郎氏に深く感謝申し上げます。

翻刻に先立ち、まず、丸山眞男研究プロジェクトのメンバー・松沢

弘陽氏が右の原則を踏まえつつ書簡資料の調査に当たられ、その中で

吉野書簡の重要性を確認された。吉野源三郎（一八九九—一九八一）は、一九三七年岩波書店に入り、戦前は「岩波新書」の発足に尽力し、戦後は、雑誌『世界』の初代編集長を務めた。その中で「平和問題談話会」の創設などにも尽力した。六五年に『世界』編集長を退き、同年岩波書店編集顧問となった。吉野と丸山の関係は、吉野からの『世界』への寄稿依頼（「超国家主義の論理と心理」）に始まるが、その後の二人の交流はこの吉野書簡から窺うことができる。丸山における吉野の存在の大きさを示す文章として、「君たちはどう生きるか」をめぐる回想——吉野さんの霊にささげる——」（一九八一年八月、『丸山集』第一一巻に収録）がある。

今回の翻刻では、竹田行之氏にご協力を仰いだ。竹田氏は、長年岩波書店にお勤めになり、吉野源三郎の指導をうけて仕事をされ、丸山とも度々接された。また、『福澤論吉書簡集』（全九巻、岩波書店、二〇〇一年—〇三年）の刊行に協力され、『小泉信三書簡 岩波茂雄・小

林勇宛全百十四点』(慶應義塾福澤研究センター(近代日本研究資料(9)、二〇一〇年)を編集され書簡の校訂注解に当られた。こうしたご経験をもっておられる同氏より多大なご助力をいただくことができ。資料の整理と本文の校訂を竹田氏・山辺春彦・金子元・川口雄一が行い、直後注は竹田氏に作成していただいた。この場をお借りして、竹田行之氏に厚く御礼申し上げる。

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長 大久保喬樹

凡例

- 一、書簡の配列は発信年月日順とし、配列順に三桁の書簡番号を付した。
- 一、かなづかいは原文のままとした。促音は小書きで統一した。
- 一、漢字は原則として現行字体を用いたが、人名についてはこの限りではない。

- 一、明らかな誤字・脱字は特に断りなく訂正し、句読点を適宜整えた。
- 一、吉野は「小生」等を小書きにしているが、翻刻に当たって、本文の字の大きさは統一した。

- 一、封筒表・封筒裏など、記述の場所を表示する際は「」を用いた。丸山による書き込みは「〜」で示した。編者による補足は「〔〜〕」で示した。

- 一、末尾に書簡のタイトルを一覧として掲げた。タイトルは、丸山によって付されたものと編者によるものがあり、右の要領に従い表示を区別した。

〇〇一 一九五〇年二月二十九日

丸山眞男様

昭和二十五年十二月二十九日

吉野源三郎

押しつまりましたが、御病勢その後如何ですか。どうぞ御大事に。小康を得ましたら、熱海へでも出かけて冬を暖くお過ごしになるやう。緒戦で敵を圧倒してしまう御覚悟が肝心と存じます。

小生御見舞にあがりたいのに、大晦日まで雑用山積、寸暇を得ません。あしからず。御病中のこと、僕に相談にのれることがありません。決して遠慮しないで下さいまし。とり急ぎ、御見舞まで。匆々

〔封筒表〕 丸山眞男様

〔封筒裏〕(昭25)十二月二十九日 吉野源三郎

(昭25.12.29. 病氣見舞)

○丸山はこの年の九月、一〇月に「三たび平和について——平和問題談話会研究報告」の担当部分の執筆と議論のとりまとめにあたった(十一月発売の『世界』一二月号で発表)。その後肺結核を発病、翌年早々の国立中野療養所への入院となった。○「熱海」は熱海伊豆山にある惜樸荘のこと。岩波茂雄が津田左右吉著作出版法違反起訴事件で下獄に備えて保養のために建てた別荘で、吉田五十八の設計で知られる。

〇〇二 一九五一年二月一三日

丸山眞男様

昭和二十六年二月十三日

岩波書店 吉野源三郎

先週土曜日久しぶりでお目にかゝり、少くとも外から拝見した限りではたいしておやつれになっていない御様子に、安神いたしました。

しかし御病気の性質上、こゝ一年か一年半は絶対に無理はおできにならないのですから、申すまでもなく、闘病第一の方針で万事御処置いたゞきたく、切に御自愛を祈ります。

それについても、経済的に御心配のないだけの条件を作らねばなりませんから、その点どうぞ遠慮なく御相談下さるやう。その方が遠慮して下さるより何千倍かうれしく思ひます。論文集出版の件なども、決して無理にはお願ひできませんけれど、或る見当がつくだけにさへなつていれば、私としてはいろいろやり易いので願ひ出るわけですから、それからお目にかゝつて御相談しませう。

それから鵜飼さんから頼まれた件、お手許の書類を預かつて帰るつもりでいて忘れて帰りました。今井君にでも托してお届け下さいませんか。私が目を通した上整理してお送りすることにします。

講和の問題、どういふことになりましたか。今日、「世界」で岡崎氏の談話を速記にとりましたが、結語は、「蓋をあけて見ると国民は意外に失望を感じるやうなことになるかも知れない。しかし、ポーツマス条約における小村寿太郎の例もある。国民の隠忍自重を希望する」という趣旨であつた由、——いろいろな意味で隠忍が要求される時代になりませう。御自重を切望いたします。また拝眉の節、万々。

〔封筒裏〕中野区江古田 国立中野療養所第十一舎 丸山眞男様

〔封筒裏〕封 昭和二十六年二月十三日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎
〔昭26・2・13〕 見舞・経済的援助〕

○「鵜飼さん」は鵜飼信成、平和問題談話会会員。「今井君」は今井清一、当時丸山と林茂による「原田日記」（「西園寺公と政局」）校訂作業に参加していて、丸山と岩波書店をたずねる機会が多かった。○「講和の問題」、一月末にダレス米講和特使が来日し、対日講和条約の争点が煮詰まってきた状況をさす。○「岡崎氏」は岡崎勝男、当時外相。

〇〇三 一九五一年三月二十九日

丸山眞男様

昭和二十六年三月二十九日

吉野源三郎

先日は御見舞にあがりながら長坐しあとでお障りがなかったか不安に存じました。

扱、あの節御依頼を受けたパシフィック・アフエアーズへの寄稿の件、一昨日蠟山芳郎氏に御目にかゝり御相談しました結果、改めてお打合せを必要とする事項がいくつか出ましたので、至急お訪ねしたいと考へつゝ、目前の用事に拘束されて遷延を重ねています。いづれ近日中拝眉の上詳しく申しあげますが、今日までの御構想の形であちらへ寄稿することについては蠟山さんは御反対ですし、私の考へでも御再考を乞ひたいと思ひます。あちらへは御病気を理由として簡単に遅延の諒解を遂げておかれるのが然るべきかと愚考いたします。御面晤の

機を得て万々。以上

雄二郎御見舞の機会に粗略ながら結論のみお伝へ申しあげました次第、悪しからず。

〔封筒表〕丸山眞男様 御直披

〔封筒裏〕封（昭26）三月二十九日 岩波書店 吉野源三郎

〈Pacific Affairs 寄稿の件〉

○講和条約がこの年の夏の終りの頃に締結が予定されていて、それに対する英文による意見表明についての相談ではないかと思われる。『パシフィック・アフエアーズ』（Pacific Affairs）は太平洋問題調査会（Institute of Pacific Relations）の機関誌。○蠟山芳郎は当時共同通信社の社員で平和問題談話会の会員。○「雄二郎」は岩波雄二郎、病氣見舞いのおりに託したと思われる。

〇〇四 一九五一年一〇月三日

丸山眞男様

昭和二十六年十月三日

岩波書店 吉野源三郎

退院の御通知拝見しました。早速伺ひたいところ、世界の校了まぎわで追ひまわされ、失礼してしまひました。昨日岩波がお訪ねして御近況今日承知しましたが、病院とちがつて来客も多く談論風発でからだにお障りなければいいがなどと、余計なこと考へています。

「世界」の十月号、予想以上の反響で、いまでも毎日投書が多いときは二十通位、少いときでも五六通は届きます。組合関係で直接に私たちのところへ申しこんで来た注文だけでも約二千部あります。この春

の国鉄のパンフレット以来、平和問題談話会の主張は、漸く組合運動にとつて理論的基礎を現実に提供しはじめているやうに思はれます。

たいへん遅かったとはいへ、丸山さんなどの一方ならぬお骨折りが決して仇花で終らなかつたのを知つて、うれしく思ひます。ネールがサンフランシスコ会議に対する態度を決した八月十九日の会議とかにも「世界」などに表現された日本人の意向が参考とされたという話も伝へ聞きました。こんどの特輯の反響の大衆的なことといひ、海外や国内への実際的影響といひ、何かこんどは手応へのあつた感じがします。学者の抽象的論議に過ぎないとか、理想に留まるとかいわれ、現実の政治運動を展開しない点でとやかくいはれながら、却つて現実的な効果がこのやうに生じて来ていることは皮肉なことですね。しかしこれは当然といへば当然で、日本の危機的な状態が一切の現実の問題を原理的な課題として私たちに直面させているからでしょう。

それにしても、そろそろ、エゲツない悪罵を以て反撃が開始されていますし、言論における対立もこれからは真剣です。はやく健康を取り戻して、どんどん御意見を発表していただきたいと、文字通り鶴首の思ひです。

いづれ近日中お訪ねいたしますが、とりあへず、御見舞と共に右御報告まで。

〔昭26.10.3.付、(「世界」の反響)〕〔原稿用紙裏〕

○封筒なし。○九月八日、対日講和条約がサンフランシスコで日本を含む四九カ国によつて調印された。「世界」のこの年の一〇月号は九月早々に発売され、月刊

雑誌として異例の重刷をくりかえし累計して初版発売部数の約三倍から四倍に達する反響をよんだ。○「国鉄」は国鉄労組のことで、労組が対日講和条約への態度決定にあたって平和問題談話会声明を討議資料としたことを指す。

〇五 一九五一年一月二十四日

丸山眞男様

昭和二十六年十一月二十四日

吉野源三郎

十一月十五日御差出しの手紙を拝見して、すぐにもお目にかかりにゆくつもりで返事を差しあげなかつたのですが、病気になるって二日ばかり休んだりした上、年末常例の組合の賃金改定案が出たりして、また忙しくなり、昼間抜け出して伺うことができませんでした。それで大急ぎでとりあへずこの手紙を書きます。

御申越しの御事情はよくわかりました。今の御病気でこんな心配をなさらなければならぬこと、全く残念です。とにかく、御申出の金十五万円は承知いたしました。岩波書店として御用立てすべく用意します。返済についての御配慮も諒承いたしました。これについては余り、御心配なさいませぬよう。来年のうちに一冊本ができれば解決することと存じます。ついては、いつまでにお届けしたらよろしいのか、御予定を小生までお知らせ下さい。

しかし、もう少し立入った話ですが、どうせ御義兄も売るお心積りの家であり、その必要が迫つてのお話ですから、いっそ、あなたがそ

れをお買取りになるとして、どうなるか、——それもお考へになつてはどうでしょうか。言いかへれば、御義兄が今の家をどの位の値でお売りになる予定か、差当つて御必要な金額はどのくらいか、それによつて、今あなたの権利金として御予定になつているものを御義兄に廻し、あとを適当に分割払いということにして、あなたがお買取りになるという方法は考へられないでしょうか。岩波としては、あなたの御著作の予定と睨みあわせて、もし、その分割払いを負担できるなら負担してもよろしいのです。そうすれば、家を探すとか、引越しをなさるとかいう、煩雑な御苦勞がはぶけますし、御義兄としても別に不利益をお受けにならないわけですし、いろいろ都合なのではないでしょうか。これは無論、御義兄が、いま、あの家のお価格に相当する金額をまとまつて御必要としないという前提で考へているわけですが——とにかく、右の方法も一応お考へになつて、みなさんで御相談になつて見ては如何でしょうか。もちろん、私たちの方でも条件によっては不可能かも知れません。そのときはそのように申しますから、お考へになつて下さい。いずれお目にかかつて御相談しますけれど、問題にはしてみても下さいませんか。なんとか、よい方法がみつからないと限りませんから。

御返事がおくれているので、これだけ取急ぎ申しあげます。おからだ御大切に。以上

〔封筒表〕 目黒区宮前町六四 丸山眞男様〔速達〕

〔封筒裏〕 封 昭和二十六年十一月二十四日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〈宮前町の家売却の件〉

○翌年六月ここを引き払い、武蔵野市吉祥寺に転居した。

〇〇六 一九五三年九月四日（消印）

丸山眞男様

昭和二十八年九月四日

岩波書店 吉野源三郎

だいぶ涼しい日がつゞきますが お元氣のことと存じます。小生も長い間休んでいましたが、漸く健康が恢復して九月から毎日勤めはじめました。御心配をかけましたけれど、これでまたとどおり働けるつもりでいます。他事ながら御休、心下さいまし。

さて、この夏には例によって「世界」のためにたいへん無理なお願いをして、ほんとうに恐縮でした。特別な御好意によって滞りなく連続の座談会も完結できましたし、その上、非常に充実した内容のものになりました。小生としては近來になくうれしく存じました。特輯号の前景気はおかげでたいへんよろしく、今日発売でしたが殆んど即日売切れに近く、三四日内には出版元では品切れになるだろうということです。心から御礼申しあげます。

M S Aに関する特輯がもし大きな反響を呼ぶようでしたら、それは雑誌「世界」のためだけでなく、少しは日本のために喜んでいいことだろうと考えます。そうあって欲しいものですが……

いずれ拜眉の上万々、とり急ぎ御礼まで。匆々

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様

〔封筒裏〕 封 昭和二十八年九月三日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〔昭28.9.3. 「世界」連続座談会御礼〕

○「世界」の連続座談会とは「危機はここまで来ている」とサブタイトルを付された座談会で、その第四回「民主主義の名におけるファシズム——危機の政治学」は辻清明、都留重人、丸山眞男によっておこなわれ、同誌一〇月号（特輯「M S Aと再軍備」）に掲載された。○当時再軍備と基地態勢強化の進行があり、六月に政府は対日M S A (Mutual Security Act) 援助に関する日米交換公文を発表、七月に日米交渉が始まった。交渉は九月に中断され、一〇月早々にワシントンで防衛問題について池田・ロバートソン会談が行われ、緊迫感が強い時期である。

〇〇七 一九五六年三月三〇日

丸山眞男様

昭和三十一年三月三十日

岩波書店 吉野源三郎

先日は座談会でひとかたならず御骨折りを頂きありがとうございました。毎度勝手なお願いを申しあげ恐縮ですけれど、けっして我儘が言い易いという気安い気持ちからではないつもり、御海容頂きたく存じます。

さて、かねて御相談申しあげました「現代思想」の講座、御構想を示して頂いたものに基き、粟田、古在、清水氏などと数回議論いたし

ました。話しあっているうちに意気昂って、どうやらこれは画期的な仕事になりそうな予感もしてまいりました。たゞ、全巻の構造については、——内容は清水氏もお示しの構想に賛成ですが——多少違った意見が清水氏から出ております。それで、両方の意見を一つに総合するとどんな形態の講座となるか、それについて清水氏が一文を草し、それをめぐってもう一度討議してみようということになりました。これは一つには、何かまとまった材料がないと、意見がいろいろと出て、そのまゝ、開放となる危険があるので、それを防ぐ意味もあります。

清水氏はいま箱根でそれを執筆しておられるはずで、そして帰京は四月一日か二日の予定です。同氏の帰京をまって早速この綱領草案をめぐってもう一度御相談願いたいのですけれど御都合は如何でしょう。できれば三日の夕刻あたりお集り願ったらと考えますが、夜分の外出が御障りありとすれば、昼間に改めまして勿論結構です。

お示しの御構想を拝見したり、皆さんとお話していると、前にも申したとおり、これは今後の日本の思想にとつてたいへん重大な任務を帯びているという気がしてまいりましたが、このようなことは、中日事変中に岩波新書を企画したり、「世界」で平和問題を採りあげましたとき以来、あまりなかったことであります。なんとか成功させたいと思っております。

それにつけても、この仕事にはどうしてもあなたの御指導と御協力を仰がねばなりません。唯今のところ、基礎的な計画の御相談には務台理作先生、清水さん、丸山さん、中野さん、古在君の五人の御力

を期待しております。くれぐれもよろしくお願い申しあげます。但し、今回の講座はたゞ岩波講座「現代思想」として発表し、いままで例になつておりませんでしたような、責任編輯者とか監修者とかの連名は、発表しないでまいろうと考えています。これは一つには、丸山さんの御都合も考慮してのこととございます。ですから、その点についての御懸念はお捨ていたゞきたたく、たゞ、小生としては、実質的ななんとしても御力添えをいたゞきたいのです。事務は塙の担当となる予定ですが、小生も今回の講座には直接関係してまいりませんであります。本屋の仕事にたゞさわって長年碌な仕事もしてまいりませんでしたが、これは完成後少しは自ら慰められる仕事になつてくれはしないかと、ひそかに期待をかけている次第です。

右、とり急ぎ御願いと共に御都合御伺いまで。いずれ拝顔の上万々。匆々

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様〔速達〕

〔封筒裏〕 封 昭和三十一年三月三十日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〔昭31.3.30〕 座談会札、「現代思想」構想

○岩波講座『現代思想』はこの年の一月から刊行が始まり、全二二巻（うち別巻一）をもって翌年一二月に完結した。この種の講座の定式となつている現代思潮の諸潮流・諸主義の解説という方法を廢し、現代の歴史的現実からの挑戦を如何に思想が受けとめ、どのように向かい合うかという観点から柱をたて、巻別編成をおこなつた。○「粟田、古在、清水氏」は粟田賢三、古在由重、清水幾太郎。○「塙」は塙作樂、丸山とは東京府立第一中学校と一高以来の友人で当時岩波書店社員。

○「中日事変中に岩波新書を企画」、昭和十三年二月、クリステイ『奉天三十年』(矢内原忠雄訳)を第一冊として発足、赤版新書とも呼ばれ、戦中期に九八冊を刊行した。この叢書の責任者は吉野であった。

〇八 一九五七年二月五日

丸山眞男様

昭和三十三年二月五日

岩波書店 吉野源三郎

雪が降っても相変らず暖い冬ですが、その後引き続きお変りなきことと存じます。

さて、いつぞや、若い学者の方々に今後の御執筆を願う件について辻さんと御一緒に御意見を伺う機会を得たい旨、お願いしてありましたが、辻さんの御都合では八日の午後三時から五時の間ならばよろしい由、今日御返事を聞きました。先日のお話では、二月の六、七、八の三日のうちならば丸山さんも御都合がつくように伺っていました。右の日取りで如何でしょうか。お差支えなければ、甚だ恐縮ながら八日(金)午後三時に岩波までお越し下さいませんか。もしお差支えがあるならば、ちょっと電話でもその旨お知らせいたゞきたう存じます。とりあえず、右御伺いまで。いづれ拝眉の上。頓首

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男先生 (速達)

〔封筒裏〕 メ 二月五日 吉野源三郎

〔昭32.2.5. 若い学者紹介依頼〕

○「辻さん」は辻清明。○封筒表・封筒裏は代筆。

〇九 一九五七年一〇月

旅券で出ないかも知れないと考えて、自分自身あまり用意していなかったのが急に來ることになって、お別れの御挨拶もできずこちらに來てしまいました。手術はもうお済みと思えますが、経過は如何でしょうか。——中国の实情は、とにかくすばらしいものです。お目にかかってお話するのが楽しみです。多分、二十六日には帰国いたします。

〔葉書右欄〕 日本東京都 中野区江古田三丁目

国立中野療養所十一舎 丸山眞男様

広東にて 吉野源三郎 (昭和32年)

〔訪問先の中国から〕

○学術文化視察団(团长安倍能成)のひとりとして、九月二日から一〇月二日まで中華人民共和国を訪問した。絵葉書の裏面は魯迅先生之碑の写真。

〇一〇 一九五八年六月二〇日

丸山眞男様

昭和三十三年六月二十日

吉野源三郎

昨日京都で猪木氏に会いました。私がお目にかゝるまえに、あなた

のお手紙が届いていて、私から改めてお話すまでもなく、趣旨はよく諒解して下さっていました。私からはむしろこれまでの経過をや、詳しく説明しておきました。結論としては、東京でも研究会は必ずしも会員だけでなく、会員外の方にも必要に応じて参加していたり、援助していたり方針なので、京都でもそのつもりで、必要だと思われる方には参加していたら、そのうち新会員加入に関する手続きその他が明確になったとき、従来の参加者のうち適当な方の会員としての資格を承認してもらえばよろしいだろうということで、この点は恒藤末川両先生も御諒解下さいました。加藤新平氏や青山秀夫氏などの名がそれに伴って出ました。そんなわけで猪木さんもメンバーの顔ぶれにあまり拘らず、やりやすいように、加藤氏などの参加を求めて、実際に効果のあるように進めて下さるおつもりです。御心配いたされた件もどうやら無事に通過しそうで、御同慶に存じます。

小生ちょっと旅行してみても何か深い疲労を感じる事が多く、自分でも気になります。多分肉体的にも精神的にも一皮脱皮する時が来ているのでしょう。肉体的には、でもう一度変態すると完全に老人になるわけです。いずれ拜眉のおり万々。以上

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様

〔封筒裏〕 封 昭和三十三年六月二十日

千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〈昭33.6.20 京都の会員につき猪木氏と〉

○「猪木氏」は猪木正道で、憲法問題研究会京都支部の運営について猪木を訪ねた

報告である。同研究会は、大内兵衛、茅誠司、清宮四郎、恒藤恭、宮沢俊義、矢内原忠雄、湯川秀樹、我妻栄の諸氏を發起人として東京で六月八日に創立総会をもつた。京都支部は恒藤恭、末川博を代表とし発足し、猪木、加藤新平も参加、青山秀夫もやや遅れて参加した。

〇二 一九五八年八月七日

丸山眞男様

昭和三十三年八月七日

吉野源三郎

おvariなく御精励のことと存じます。

さて、折角御勉強のところをお邪魔するようで心苦しいのを押してこの手紙を認めます。

中東の動乱から巨頭会談をめぐる折衝まで、いわゆる瀬戸際戦術も極度のところまで来ました。この最近の情勢を見ますと、緊迫が強まれば強まるほど、平和共存や話しあいによる解決などという、在来理想として唱えられていたものが、観念的なものから現実的なものになって来ていることが著しく眼につきます。一面から見れば、平和がしきりに唱えられていたにも拘らず現実の緊迫はここ二三年一向に緩和しないで進行して来たともいえますが、同時に、それが共存を否応なしに現実の課題として強国の政治家たちに強く突きつけるに至ったともいえます。例えば中立主義の問題にしても、東欧中立化の提唱はなかなか現実の問題になりませんでした。こんどの中東の問題は、中立地帯を設けるという思想を現実の解決策として取りあげさせる可能

性を多分に生み出しています。何か歴史の進行の中にあるパラドキシカルなものが、たいへん大規模にはつきりとあらわれて来ているような感じがいたしますが、これをどう考えていったらよいのでしょうか。

——平和問題談話会の平和声明以来の共存の思想を、ここでもう一度ふりかえって整理していただけたらと考え、松本正夫さんと古在君と丸山さんのお三人で、それについての座談をしていただくという計画が出ました。問題が問題なので、私自身お願いにあがりたいたいのですが、目下、編輯部長の稲沼が病気休養のため、どうしても伺えません。それで緑川が何うことになりました。何も添え手紙を必要とするわけではありませんけれど、私としてお願いにあがれない残念さがありますので、この手紙をもっていつてもらいます。詳しいことは緑川からお聞きいたゞきたく、こんどはぜひ御参加下さいますようお願い申し上げます。以上

〔封筒表〕 丸山眞男様

〔封筒裏〕 八月七日 吉野源三郎

〈昭33.8.7. 緑川君持参 中東動乱について、座談会〉

○「中東動乱から巨頭会談をめぐる折衝まで」とは、前々年の一〇月にソ連がハンガリーに武力介入（ハンガリー事件）、同月にイスラエル軍がエジプトに侵入、英仏軍も同調（スエズ戦争）して中東情勢が不安定になり、この書簡の前月にはアメリカ海兵隊がレバノン上陸開始、ソ連中国側が激しく非難して冷戦が激化した状況をさす。○「松本正夫さん」は慶応義塾大学文学部教授、哲学。「古在君」は古在由重。○「稲沼」は稲沼瑞穂、平和問題談話会会員。「緑川」は緑川亨。

〇三 一九五八年九月四日

ごぶさたいたしております。

宗教会議に出席のため来日中のレイヴィット氏をかこんで内輪の会を開きたいと存じます。もし御都合よろしかったら、九月十一日、木曜日ですが、夕方からの時間をとっておいていたゞけないでしょうか。他にお誘いする方は、河野与一、清水幾太郎、久野収、沢柳大五郎氏方。こちらからは栗田と小生と二人の予定です。場所その他はいずれ御連絡いたします。御予定だけお知らせいたゞければありがたいと存じます。

九月四日

吉野源三郎 代

丸山眞男先生

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男先生〔速達〕

〔封筒裏〕 メ 九月四日 吉野源三郎 代

〈昭32^{〔マ〕}.9.4. レーヴィットをかこむ会〉

○カール・レーヴィット (Karl Löwith) はナチス支配下のドイツから逃れて一九三六年から四一年まで東北帝国大学で教鞭をとっていた。河野と沢柳の名があるのはそのときの縁である。五二年からハイデルベルク大学教授。○代筆。

〇三 一九五九年一月二六日

丸山眞男様

昭和三十四年一月二十六日

岩波書店 吉野源三郎

その後お変わりございませんか。

旧臘「思想」の件につき御心配いたゞきながら、そのまゝ、今日に至り恐縮に存じております。栗田及び清水氏とも相談の上、今回はとりあえず鶴飼信成氏と大塚久雄氏とに御参加頂き、旧メンバーは差支えなき限り御残り頂くとうことに致しました。まことに不徹底でお叱りを免れないと存じますけれど、どうにもまだ話が熟しませんためお宥し頂きたく存じます。詳しくは拝眉の折りに譲りたく、浅見より速達で願ひ出ましたとおり、近くその機を得られ、は幸甚でございます。とり急ぎ右御連絡まで。匆々

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様

〔封筒裏〕 封 昭和三十四年一月二十六日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〈昭34 1. 26 思想コモンの人選増加について〉

○「思想」は一九二二年創刊、初期の頃は和辻哲郎が顧問となっていたが、二八年八月に休刊、翌年、和辻哲郎、谷川徹三、林達夫の編集で復刊した。戦争末期と敗戦後まもなくの二回の休刊を経て、四七年に岩波書店編集として再出発し、宇野弘蔵、久野収、清水幾太郎、辻清明、都留重人、丸山眞男らの助言を仰いでいた。○「浅見」は浅見いく子、役員秘書。

〇四 一九五九年七月十三日

丸山眞男様

昭和三十四年七月十三日

吉野源三郎

今日、大内先生にお目にかゝり、前回矢内原先生の提案に対する先生の案を伺った後の、ごぞんじの経過を報告し、矢内原先生の解散論に対してはお考え直しを頂きたいというのが一同の一致した希望であること、また、平和問題談話会の今後の活動乃至は存続の仕方、及び国際問題談話会との関係については、一度、有志と先生との御懇談の機会を得たいこと、その上で方向を定めたいと考えていること、——をお伝えしました。先生は事情をよく諒解して下さい、こんどの十八日を除く他の日ならいつでも、諸君と会って話そうという御返事でした。いずれ明後十五日、お目にかゝれると存じますので詳しくはその節お話し申しあげますけれど、とにかく、大内先生は、インテリゲンチアの責任について真剣に考えておられます。今後の平和問題談話会のためにも、その掲げている大義のためにも、たいへん重大な時機に立っていると存じますので、一度、大内先生と皆さんで——出来るだけ多く——充分にお話しあいをお話しただけではありませんか。とりあえず、来る二十日（月）を明けておいていただければ幸甚です。余は拝顔の節万々。とり急ぎご報告まで。以上

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様

〔封筒裏〕 封 昭和三十四年七月十三日

〔昭34〕 7. 13 平談会解散論の前後策^(下)

○「矢内原先生の提案」は、一九五八年二月、平和問題談話会の一〇周年の会の発言に始まり、同会の当初の課題は決して終わっていないし、もつともつと研究を進めるのが当然である、しかし今のように会を開いても集まりが悪く会員の熱意が伺えない状態ならば存在の意味がないかという解散論である。

〇二五 一九五九年七月二七日

丸山眞男様

昭和三十四年七月二七日

吉野源三郎

去る二十四日、お目にかゝれるつもりのところ、急に熱がお出になつたそうでお出席がなく、たいへん残念でした。あの日、矢内原先生も出席されることとなり、大内先生、都留、清水、中野、久野の四氏が集つて、旧臘の平和問題十周年の会以来の動きを改めて御報告申しあげると共に、最近の国際問題研究会の経過と、矢内原先生の解散論に対する各自の御意見を話していただき、かなり隔意のない御相談ができました。丸山さんの御意見や希望については、私がお聞きした限りでこう諒解している旨を私から申しあげました。

当夜出席した方々の間では、現在の状況の中で平和問題談話会として空しく手を束ねていくべきではないということは、問題なく同意されたのですが、では、何を為すべきか、もしくは何を為し得るか、ということになるといういろいろ実情を考慮して意見も区々でしたが、矢内

原先生も解散論は固執されず、とにかく、平和問題談話会として全員が集まる機会を作り、旧臘以来の経過を全員に報告すると同時に、国際問題研究会の研究成果について報告を聞き、その上で、どれだけ一致して何らかの社会的な行動がとれるかを考慮しつつ、次ぎの問題を相談してみることしようということになりました。その節、かなり遠慮のないいろいろな発言もありましたが（それについてはいずれ拝眉の節詳しく申しあげます）結局一番問題になるのは議長安倍先生のお考えと態度なので、それを確かめたいという話で、そのため、当夜お集りの方々だけで成案を作つて安倍先生にもつてゆくよりも、ありのままの動きと問題とをそのまま、安倍先生に申しあげ、お考えを聞くのがよからうという結論になりました。大内先生自身安倍さんを訪ねてもよいという申出でしたが、安倍先生が北軽井沢におられるので、私が代つて先生をお訪ねするというので、当夜は解散になりました。

ところが、一昨二十五日、安倍先生のお宅に連絡しましたら、ちょうどその日帰京されるということでしたから、早速、二十五日夜お訪ねして東京でお目にかゝることができました。

安倍先生は、平和問題談話会の中でこのような真面目な動きのあることには改めて感銘を受けられた様子でしたが、平和問題談話会として集団的に何ができるかについてはまだ懐疑的でした。しかし、今日、日本の知性を代表している人々が、日本の運命にかゝる問題について、責任ある発言をして国民に対する責任を果すことの必要は、もちろん先生も認めておられます。たゞ、先生としては率直に自分が不勉

強で何にも研究していないため、実際に、国民に対して何を警告しなければならぬか、政府当局に対して、何を要求し、何を抗議しなければならぬか、確信がない旨を語っておられ、一度「丸山君あたりのお話をよく聞いてみたい」というお話でした。安倍さんは、平和問題談話会の会員の中でも、特に都留さんと丸山さんに深い信頼を寄せられています。それで、私は、「では、ぜひ近いうちに丸山さんとお会いしてみてください」と申しあげておきました。

以上のようなわけで、御苦勞さまですけれど、丸山さんが安倍先生にお会いして下さる必要があると存じます。とりあえず、それが先決問題で、その上で先生のお考えもきまり、そのお考えを考慮して、現在の世話人の方々の方策もきまるという順序になります。

ごんじとは思いますけれど、安倍先生には共産主義に対するかなり根深い不信がありますし、今日の日本の進歩的思想家や政治家に対しても、人格的な信頼感をもっておられません。そして、人格的な信頼感をもてない故に、その側からの主張についても、十分な思慮を経たものとは認め難いという考え方が底にあります。ですから、同じ結論でも、この人なら自分たちに代って——もしくは国民全体に代って——十分に考え抜いてくれるという信頼をもった人からの発言なら、かなり大幅に信頼して採用される傾向があります。——それだから、と申すと、丸山さんとしてはかえって引受けにくくお思いになるかも知れませんが、以上があらまゝのところですよ。ぜひ、一度安倍先生にお会いになって下さいませんか。先生も希望しておいでです。

*

おくれましたが、御病氣の方はいかゞですか。安倍先生は今週中は在京されるはずですよ。私が丸山さんにお目にかゝってゆっくり御相談できるというのですが今週はいっぱい用事がつまっています、その暇をまっていると遅くなると思いますので、とり急ぎ手紙を認めた次第です。御都合よろしき折り、御連絡下さいまし。以上

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様 (速達)

〔封筒裏〕 封 昭和三十四年七月二十七日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〈昭34.7.29. 平談会解散論集りの報告〉

○前年から社会科学の研究者、評論家、作家らの自主的な研究会が作られ、国際問題談話会と仮称されていたが、たまたま日米安全保障条約改定の動きがすすんだので、春には正式に設立され、討議成果がこの年と翌年に二回にわたって『世界』に発表された。

〇二六 一九五九年九月二日

丸山眞男様

昭和三十四年九月二日

吉野源三郎

箱根においてになりました由、いゝ時に東京をお逃げになったと思えます。この二三日の東京の残暑の激しさ、僕には震災のあった年が思い出されるほどです。この手紙を認めているそばで浅見が窓のそばの寒暖計を見て三十四度だと申ししています。

さて、折角涼しいところに逃げてゆかれたのに編輯部の者が暑苦しい用事をもって追っかけてまいりますこと、商売とはいえ、なんとも恐縮です。用件は直接緑川が申しあげると存じますが、世界十一月号を安保改定を中心とする特集号にする予定で、それにぜひお力を貸していただきたいのです。講和特集のときに平談会としてまとまったものを出す暇がなかったので、メンバーの方々に寄稿や座談会の形で出していたのと同形式で、こんどだけはぜひ丸山さんに何かお書きいたゞきたいのです。格別に御考慮下さいまし。

なお、安倍先生の件、大内先生からお葉書で、「あの自叙伝を読んでも、この際平談会にもう一度安倍さんに出たいゞいても、妨げないように思う。ぜひ一度安倍さんにお会いしたいと思う」と申して来られました。その旨、私より安倍先生にお伝えしておきました。

いずれにせよ、「諸君に自叙伝のゲラを読んでもらって、それでもということなら——」というのが安倍先生の申し出なので、あれを読んだ後、どのように出るか、それを私たちの方で決めねばならなくなっています。安倍先生に対して「あれを拝見して、よくわかりました。

重ねての会談はやめます」という意味の御返事をするか、それとも「あれを拝見しましたが、やはり一度お話ししたい」と御返事するか、どちらかにしなければなりませんし、あきらめるならあきらめるで、その後の方針をきめる必要があるわけです。丸山さんのお考えを伺わせていたゞきたいと存じます。都留さんは、「大内先生に会っていたゞいて、円満に国談会へバトンを渡すよう、安倍先生の諒解をとりつけた

ら——」という意見です。中野さんは、「こんどの世界に掲載された共同研究を先生に読んでいたゞいて、それで一致できなければしかたがないし、あれに賛成だというのなら、それで話がつくのではないか」という意見です。中野案によれば、こんどは私たちの方で、まず共同研究の結果を読んで下さいと要求することになります。どういう風によつてゆきましようか。

乱筆になつてしまつて恐縮ですけれど、右の件至急決定しなければなりませんので折返し御意見を伺わせていただきとう存じます。

お疲れはなりましたか。私は今年はいへん元気です。どうぞん用事を申しつけて下さい。以上

〔封筒裏〕 丸山眞男様 托緑川亨君
〔封筒裏〕 メ 九月二日 岩波書店 吉野源三郎
〈昭34.9.2. 安保改定特集 安倍さん自叙伝問題〉

○安倍能成は一九五八年に『週刊新潮』に「戦後の自叙伝」を連載したが、そこには平和問題談話会にふれた記述がある。一九五九年一〇月に同じタイトルで新潮社から単行本として出版された。

〇七 一九五九年二月二日

冠省

京都平和問題談話会より別紙の如き声明文章案が送附されました。発表は東京の決定をまつていただくよう、私より連絡いたしておきま

した。

この草案をめぐって世話人を中心に御相談申上げた、来る十二月五日（土）憲法問題研究会の終了後（午後四時頃）岩波書店にお集りいたゞければ幸と存じます。とりあえず 右、御一報まで。

十二月二日

岩波書店 吉野源三郎 代

丸山眞男様

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様 〔速達〕

〔封筒裏〕 吉野源三郎（代）

〔京都平和問題談話会の声明文について〕

○この京都平和問題談話会の声明文は京都平和問題懇話会の名を以て『世界』一九六〇年二月号に掲載された。○代筆。

〇一八 一九六〇年四月一三日

丸山眞男様

一九六〇年四月十三日

吉野源三郎

先きほどお電話のあった風樹会の件につき、書類別封でお届け申しあげます。

但し、栗田に会って実情を聞きましたら、大多数の支給額は、年間参万円程度だそうで、これでは生活の助けにはならず、図書費の御援助になるに過ぎません。従って、土曜日に御相談のあった事から見る

と解決になりませんので、それについては別に考え直さねばならないと思っております。たゞ、研究生活をつゞける上には、この小額でも無きにはまざるので、御申込みになっておいては如何でしょうか。とりあえず右御連絡まで。匆々

〔研究指導している大学院学生にたいする援助の件〕

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様 〔速達〕

〔封筒裏〕 封 昭和三十五年四月十三日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 吉野源三郎

〈大学院学生への風樹会援助〉

○風樹会は一九四〇年一月に岩波茂雄が設立した財団で、当時国の政策と社会の風潮が目前のことに傾きがちであったことを憂慮して、哲学、数学、物理学など学術の基礎的学問にかかわる若い研究者たちの生活を応援することを目的とした。財団設立にあたって岩波は当時の所持金の殆んど全額を拠出した。敗戦後、一部の有価証券が紙屑同然となり残余もインフレーションで著しく減価したため、ここに記された金額のように運用と給付金の規模を縮小せざるをえなくなった。

〇一九 一九六一年一月一三日

丸山眞男様

一九六一年一月十三日

岩波書店 吉野源三郎

元日二日は快晴で、気持よく新年をお迎えになったことと存じます。小生、昨年の正月には伊豆へまいり、東京の雑沓を逃げ出したつもりが、案外に伊豆のどこにいても人出が多く、乗物で不自由をした経

駿から、本年はずっと引籠ったまゝ、で過ぎました。馬齢を加えてゆくことに、若いときは別な感慨も催されますが、まあ、健康で、家族も無事で、五日余りの休みが流水のように過ぎてゆきました。

さて、御報告がされましたが、例の平和問題談話会解散の件、安倍大内両先生会談の結果は、口頭で京都の幹事奈良本さんにお伝えしておきましたが、その後押しつまった暮の二十五日に他の用事も兼ねて上洛、二十六日に久しぶりで末川恒藤両先生にお目にかゝり、これまでの経過をお話して御諒解を得ました。両先生とも、結論については御異存なく、たゞ、京都平談会としては一月に入つてその問題を議題とした総会を開き会員の諒解を予め得る必要があるということでした。そこで手続きとして、左の三通りのうち、どれによるかは、その総会の結果を俟ち東京と連絡してきめ、その上で早速なるべく手続きを取ろうということにして帰京いたしました。

(1) 東京は安倍・大内両先生、京都は末川、恒藤両先生、それぞれ別に平談会の役割は一応終つたので、で解散という趣旨の手紙をそれぞれ別の会員に出す方法

(2) 東京都の別なく四氏連名で(1)と同じ趣旨の手紙を出すこと

(3) 右の趣旨の手紙に差出し人として、東京平談会安倍、大内、京都平談会末川、恒藤と分けて明記し、同文の手紙を全会員に出す方法
小生の考えでは、(3)が一番明確でよろしいかと存じますが、いずれそれは相談の上に行いましょう。

以上のような次第で、一月の京都平談会総会には小生が連絡のため

参加する予定にいたしております。

なお、いろいろお目にかゝつて御智慧を拝借したいことがありますけれど、それはいずれ近日中にその機会を得てのことにいたします。

今年も元気です、お仕事をたくさんさいますよう。頓首

〔封筒裏〕 武蔵野市吉祥寺三一九 丸山眞男様

〔封筒裏〕 封 一九六一年一月十三日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〔昭36. 1. 13. 平談会解散論の件、京都の模様〕

○平和問題談話会は「世界」六〇年二月号に「安保改定問題についての声明」を発表し、談話会の公的活動はこれが最後となり、しばらくの休眠期間を経てこの時期に解散の手続きに入った。

〇〇 一九六一年八月二十九日

丸山眞男様

一九六一年八月二十九日

吉野源三郎

涼しかったり急にまた暑くなったり、不順な時候ですが、お変わりありませんか。このところ暫くお目にかゝらないので一度ゆっくりお話を伺いたいとしきりに思うのですが、風のたよりに御出発前の仕度やら仕事の始末やらで、目の廻るような急がしさだと伺つて、まあ、その中へお邪魔するのめどうかなどと遠慮して伺いそびれています。

先日塙君が夜中電話で九月十五日をとつておけということ、その

日には酒を酌んで別れを惜しむ機会があるのかと考えておりましたら、また、最近葉書でそれがとりやめになったという知らせがありました。残念に存じました。

それにしても一晩ぐらいなんとかお暇はありませんかしら。個人的にもほかの人相手ではできないおしゃべりをさせて頂きたく、無理でない機会がありましたら、どのくらいうれしか知れません。年齢のせいでしょうか、近頃、朝早く目がさめて日がさしそめるころ、庭木と向かいあっていることがよくあります。すると、まるでむこうから自然に湧いてくるように、六十年の過去が今まで知らなかったような鮮明さで眼前に泛かびあがつて来ます。いったい、これにどんな意味があるのか——いま一番それが気にかゝります。現実が見えて来るということと、その意味がわかって来ることとは、私の場合、たいいてい一つでした。それが生命の感じでした。ところが、自分の一生ともいうべき歳月の内容が、まるで丘の上から見下すように眺められて来たように、改めてその意味が問われるとは——これは予期していませんでした。眼が未来へ向かって投げかけられなくなったせいでしょうか。これが老境というやつなのでしょう。説明はなんともつきましますけれど、説明してみても片づかない性質の問いなので……「困ります」と書きかけて止めました。困りはしないのです。困りはしないのですが、たいへん気にかゝります。ベルリンの危機、それを心配している私たちの存在、一切をひっくりかえしたこの現実究極の意味を与えているものは現実自身なのでしょう。

急がしいあなたに、こんな話をしかけてお宥して下さい。アメリカでの滞在は一年ぐらいでしたか。私も来年あたり暇な身になって、海外で丸山さんや中野さんにお目にかゝれるとい、のですが——

とにかく、おくりあわせがつかましたら、少数の方たちで一夕ですぐ機会を得たいと存じております。いずれ近く電話でも御連絡申上げます。以上

〔封筒裏〕千代田区神田駿河台 山ノ上ホテル気附 丸山眞男様

〔封筒裏〕封 一九六一年八月二十九日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〔近頃の心境〕

○「御出発」ハーバード大学の招聘をうけて一〇月に夫妻で渡米した。○「ベルリンの危機」八月一三日東西ベルリンの境界に東ドイツ政府が壁を構築し、米英仏が西独駐留軍を強化した。

〇二 一九六二年二月八日（消印）

Season's Greetings & Best Wishes for a Happy New Year

謹賀新年

もうぢきにお目にかかれることと存じ楽しみにしています

吉野源三郎

〔封筒裏〕 Prof. Masao Maruyama

c/o St. Antony's College Oxford, ENGLAND

IWANAMI SHOTEN, PUBLISHERS 3-2-CHOME,

KANDA HITOTSUBASHI, CHIYODAKU TOKYO, JAPAN 岩波書店

〔賀状〕

〇三三 一九六三年四月一八日

丸山眞男様

一九六三年四月十八日

吉野源三郎

昨夜無事御帰朝のことと存じます。羽田までお目にかゝりにゆきたく、その予定でおりましたところ、午後になって頭痛を覚え、早退して帰宅せねばならなくなりましたため、残念でしたが伺えませんでした。実は先週から喘息のため三、四日欠勤、昨日やっと出て来たところでした。少々からだをこわしております。

お元気でしょうか。お帰りになると勿々世間の雑用がどっと押しかけて閉口なさるのではないでしょうか。私の方はお目にかゝっているいろいろお話を伺いたいのですが、それがどっと押しかける雑用の波の一つになるのですたら……などと、気になるのもからだの悪いせいかと思えます。

私たちの方は、生活も仕事も全く相変わらずです。お話し申しあげるほどの変りがないのは、あんまりよい事ではありません。目下のところ、講座の「現代」が当面の仕事になっています。これについては、いずれ拝眉の上、いろいろ御智慧を借りたく存じていますが……

二十日塙君の会がありますとき、或いはお目にかゝれるのではないかと思っております。それまでには、私も多少元気になっておりますもり。とりあえず昨夜伺えなかつたお詫びまで。勿々

〔封筒裏〕武蔵野市吉祥寺東町二ノ三一九 丸山眞男様〔速達〕

〔封筒裏〕封 一九六三年四月十八日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〔昭38.4.18. 羽田に迎えに出られなかつた事への挨拶〕

〇一六か月にわたる米英滞在を終え、帰国した。〇講座「現代」は全一六巻（うち別巻二）、二か月あとの六月に刊行が始まった。

〇三三 一九六四年五月八日

丸山眞男様

一九六四年五月八日

岩波書店 吉野源三郎

ときどきお目にかゝりながらゆつくりお話を伺う機会もなく打過ぎしておりますが、その後御健康は如何でしょうか。私の方は、突然右の眼をやられたのがきつかけで、からだを診察してもらいましたところ、どうやら持病の喘息だけでなく、胸をやられていることがわかり、病人らしく療養することを命じられました。意外なことになって少からずしよげています。しかし、別に寝こんでいる必要もなく、社には顔を出している程度です。御放念下さいますよう。

さて、五月に入つていよいよ講座「現代」も最終巻の原稿メ切り日

が近づきました。清水さんがおりた関係で、アンケートの作製だけでなく、まえがきにあたる経過報告も私がまとめなくてはならなくなり、またため、昨今、馴れない仕事をなやましています。一度ゆっくりお目にかゝり、いろいろ教えていたゞけるとよいのですが――。

それよりもぜひお願いしたいのは、前に申しあげましたとおり、現代十四巻に短いものでも結構です故、何か御寄稿いただきたいということです。月報用ならば――とお約束下さったのですが、重ねてこんなことを願ひ出るのは、実はこんどのアンケートに対する返事のうち、インフェルトや、ムハレレ（南阿の黒人指導者）の返事のように寄稿ではなく私宛の短い手紙のものがあり、特に後者などは、寄稿できない理由を書いて来たものなのですが、これが別の形での回答になっているので、筆者の諒解を得て、本文のあとに、附録のような形で収録せよという形になりました。パーム・ダットのモスコウ大学でやった講演のうち、冷戦の部分もこの欄に収録いたします。そんなわけで、こういう形ならば、月報向きに予定して下さったものも載せさせて頂けるのではないかと考えたわけです。相変らず本屋の手前勝手とお叱りを受けるかも知れないのですけれど、一応御考慮頂けないでしょうか。このお願いがいけないにしても、いずれにしても御書き下さるものをお待ちしています。

お目にかゝってお話すべきですが、目前の用事に追われていますので、手紙で失礼いたしました。いずれこの次ぎの拝眉のおり詳しく、

匆々

〔封筒表〕 武蔵野市吉祥寺東町二ノ四四ノ五 丸山眞男様

〔封筒裏〕 封 一九六四年五月八日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〔昭39.5.8. 講座「現代」〕

○講座「現代」第一四巻は、この年の七月に刊行された。E・ムハレレ、P・ダットのそれは、補録として収録された。

〇四 一九六四年六月五日

丸山眞男様

一九六四年六月五日

岩波書店 吉野源三郎

急に暑くなってまいりましたが お変わりありませんか。

さて 昨日帰宅しましたら御惠贈の本が届いていました。増補の目次拝見して丸山さんのお書きになったもので、読まないものがこんなにもあったのかと、自分ながら意外でした。補注を拾い読みしていると、ぢかにお話を伺っているような気がして来て、ふしぎな気持ちでした。ありがとうございます。

お訪ねしたいとも思っていないながら、健康がすぐれないのと、雑用が山積しているのとで、ついのはしてしまいます。「現代」第十四巻のことで、松島から度々、丸山さんに伺ってくれといわれ、ずっと気になっているのですが、これも果せずにはいます。「現代」第十四巻について、前便であのようにお願いしましたけれど、また、できることな

ら……と今でもそう願っていますけれど、これは御無理になる限り、どうぞ御放念下さい。長い間にわたって、丸山さんにはずいぶん無理をお願いして来ましたし、こんども「世界」の方で南原先生との対談をお引受けいただいていることですし、これ以上、気のお進みにならないことをお頼みするのは、私自身にもつらく思われます。一つには、補注を拜見したり、「超国家主義の論理と心理」御執筆当時のことを思いましたりしたせいかも知れません。

おからだの方、その後如何でしょう。御元気を祈ります。頓首

〔封筒表〕武蔵野市吉祥寺（東町）二ノ四四ノ五 丸山眞男様

〔封筒裏〕封 一九六四年六月五日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〔著書寄贈への礼状〕

○「御恵贈の本」、五月末に出た『増補版 現代政治の思想と行動』（未來社）。
○『現代』への丸山の寄稿はなかった。○「南原（繁）先生との対談」は『世界』八月号（七月発売）に掲載された「戦後日本の精神革命——教育の課題として」である。

〇二五 一九六四年九月八日

丸山眞男様

一九六四年九月八日

吉野源三郎

本日電話をいたしましたところ、御旅行の由、実は今日にでもちょっとお目にか、って御相談申しあげたいことがありましたが、残念でし

た。明日お帰りとのことなので一寸手紙で御連絡申しあげることになりました。

先日おいでのとときお目にかきましたラッセル・ピース・ファウンデーションへ、日本のスポンサーを推薦する件、湯川さんの御意向もわかったので、一両日中にラッセル氏の方へ返事を出そうと存じ、その前に御意向を伺いたいです。都留さん、中野さんなどには御意見をききました。明日、久野さんと御相談します。私としては、ぜひ丸山さんの御助言を得て、最後の考えをきめたいと希望しています。けっして、責任を分けていただくというつもりではなく、純粹に御忠告を乞いなのですが——

ラッセルから求められているのは

a list of prominent Japanese who might willingly act as sponsors for our Foundation in Japan

であって、その人選については

I should wish to leave entirely to your judgement the question who should be included in this list

と申し、その目的については

Our hope is that the public identification of such people with the work of the Foundation would give confidence to our supporters and help make possible a more powerful movement.

といて、私のリストを受取ったらその人々にラッセル氏自身依頼状を出すつもりと申しています。

湯川さんと打合せたところでは別紙のような方々の名があげられました。

これについて都留さんはもっとしぼって、

⑤ 湯川秀樹

⑥ 大内兵衛

谷川徹三

広津和郎

上代たの

の五氏をスポンサーとして推薦し、この人々がスポンサーを承諾された場合に、以下二十数名が恐らく快く協力するであろうという様に報告してどうかという意見です。

丸山さんの御意見はどうでしょうか。私の考えでは、スポンサーとしての候補者のほかに、実際の諸決定を行う executives を予定しておいた方がよいと思われるのですが如何でしょうか。

とにかく私は意見を求められているのであって決定はラッセル氏の方にあるのですけれど、いままでの経過からいうと、そのまゝ進行してゆく可能性が多いので責任も感じている次第です。

十日（木）にでも御連絡いただければ幸甚に存じます。

〔封筒裏〕武蔵野市吉祥寺東町二ノ四四ノ五 丸山眞男様（速達）

〔封筒裏〕封 一九六四年九月八日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店 吉野源三郎

〔昭39.9.8. ラッセル平和財団日本協力委員会結成の相談〕

○ラッセル平和財団は前年の九月にロンドンでバートランド・ラッセルの発意で創立され、このような要請があった。ここでは五氏の名前があげられているが、若干の異動があつて、大内兵衛、上代たの、谷川徹三、朝永振一郎、南原繁、湯川秀樹の六氏が代表になり、日本協力委員会は翌年三月に発足した。財団の日本支部でなく、独立の立場にたち自主協力するという主旨で、日本協力委員会と称した。上記六氏の他に吉野など一八人が委員に就任した。同委員会の設立経緯は、同委員会の『ニューズレター』第一号（一九六五年六月）で吉野が七ページにわたつて報告している。

〇二六 一九六五年一月一日

明けまして おめでとうございます 正月元旦

長年にわたる御厚志を改めて思いかえしありがたく存じています
御健康を心から祈念いたします

東京都文京区駒込曙町二〇番地 吉野源三郎

〔葉書表〕武蔵野市吉祥寺東町二丁目四四ノ五 丸山眞男様

〔賀状〕

〇二七 一九六五年七月九日

丸山眞男様

一九六五年七月九日

吉野源三郎

お帰りになってから身体の具合、およろしくない由仄聞、その後如何でしょうか。シュワルツ氏からの話、ラッセル平和財団のことなど、

いろいろ御意見を伺いたいことがあるのですが、御遠慮申しあげていただきます。

なお、ラッセルの会への御寄附、一昨日、落掌しました。まだ、事務局の判その他が整備していませんので、実行委員会として私の名でお受取りを別紙のように認めてお届けしておきます。明日、ラッセルの会があり、碧海さんや豊田さんの發議でかなり重要な相談があります筈、ひよっとして御出席ではないかと考え——そうなればこれに越したことはありませんが——そのときまだお受取りが差上げてないのもどうかと思いますので、これを速達便でお送りいたします。

右の重要な相談と申しますのは、例のヴェトナムに関するラッセルの声明をめぐってのことですが、ごぞんじのとおり、東西の緊張に関しては中立主義的な立場を守り、何回か、仲裁の活動をして来たラッセル氏が、こんどは、ハッキリと反米の立場で、あくまでも、アメリカの軍事行動を非難し、それを抑止する行動を呼びかけています。その調子もずいぶん激しく、過日、ウェスティング・ハウス系のテレヴィでのグリフィンとの対談の速記を読みましたが、実にハッキリとして齒に衣を着せぬ言葉を吐いています。御本尊のラッセル氏がこのように旗幟鮮明であるとすると、ラッセル平和財団日本協力委員会の協力も、どうあるのが本当か、問題だというわけです。私自身の場合には、ラッセル氏の主張が正しいと考えますし、むしろ、平和運動の立場や方針からいっても、これでなければならぬように思うのですが、碧海さんには、ラッセルの言葉に多少疑義がないわけではなく、また、

豊田さんには、日本協力委員会の方々の中には、ここまではラッセル氏についてゆけないと考える方があってはどうか、という心配もあります。それで、坂本さんをゲストにして、ラッセルの声明の前提となっている現在の状況の判定について話していただき、この声明をめぐって一度、会員間で率直な意見の交換を行っておきたい、と実行委員たちは考えたわけです。私も少くとも、これは真剣に取りあげたいと思っています。豊田さんはラッセルに賛成の立場から、こう考えておられるのです。

私は、東京で何回かの空襲を経験していますので、たとえ、いまのところアメリカ軍は都市爆撃の一手手前で、軍事施設や交通網に爆撃を加えているのだと申しても、毎日のように、波状攻撃を受けている北ヴェトナムの人たちの、日々の不安が身に覚えのあることとして感じられます。まして、南では、一種の絨毯爆撃さえ行われているようなので、そこで暮らしている人々のことを想像するとたまらない気がして来ます。私たち日本人の場合には、いろいろな意味で、あの惨苦も、他の民族に加えた暴虐の酬いだと考えられましたけれど、ヴェトナムの人たちは、他の民族にどんなことをしたのでしょうか。ヴェトナムの人たち、いやヴェトナムがあそこで権力を握ったからといって、世界平和が脅かされるとは思えません。いま私たちを脅かしている危機的な状況は、かつての核兵器の軍備競争から生じた危機とは、ちがった性質のもので、責任はどうみてもアメリカにあります。

——こんなことを書くつもりで、この手紙を書き出したわけではあ

りませんでした。私には、核時代の戦争と平和の問題が、こんどのことで、ハッキリと第二の段階に入ったように感じられるのですが、どうでしょうか。教えて頂きたいのも、その点なのです。湯川さんも非常に心労しておられるそうです。以上

記

一、金五千円也

ラッセル平和財団日本協力委員会への寄附

右 確かにお受取り申しあげました

一九六五年七月七日

ラッセル平和財団日本協力委員会

実行委員会 吉野源三郎 印

丸山眞男様

〔封筒表〕武蔵野市吉祥寺東町二ノ四四ノ五 丸山眞男様 (速達)

〔封筒裏〕封 一九六五年七月九日

東京都千代田区神田一橋二ノ三 岩波書店にて 吉野源三郎

〔昭40.7.9. ヴェトナム北爆とラッセルの立場〕

○「碧海さん」は碧海純一、「豊田さん」は豊田利幸。いずれも日本協力委員会の委員。○この年の二月から米空軍の北ベトナム空爆（いわゆる北爆）が始められた。

〇二八 一九六七年七月三十一日

梅雨があけてやっと不健康のドン底から抜け出て少し元気になりました。二日前、当地に來ました。朝晩は肌寒いほどの涼しさです。八月十日すぎまでおりますつもり。よろしかったら二三日おいでになりませんか。——六十代の半ばを越して、もう一度自分の思想の再吟味をしなければならぬのは、鈍根の性、致し方ありませんけれど、これが生きているということなのかなとも考えています。いろいろ教えて頂きたいことばかりです。

〔葉書上欄〕東京都武蔵野市吉祥寺東町二ノ四四ノ五 丸山眞男様

七月三十一日 長野県軽井沢町追分六〇四六 村山方 吉野源三郎

〔軽井沢から〕

〇二九 一九六九年四月二二日

先日は久しぶりでお目にかかりましたのに余りお話す機会なくお別れし、心残りに存じました。その後、また、病状はお悪い由、経過如何でしょうか。

大学のこと、聞けば聞くほど学生運動の「頽廢」を感じ、腹が立つて來ます。行くところまで行って最悪の結果を見るまでは眼がさめないのだとすれば、知性がどこにあるのかと聞きたくなります。大切なお体です。こんなことで痛めないよう、くれぐれも御自愛下さいまし。

いずれお目にかゝれる折り万々。四月十九日

今日退院されます由聞きました。蔭ながら喜んでいきます。21日

〔葉書上欄〕武蔵野市吉祥寺東町二ノ四四ノ五 丸山眞男様

文京区本駒込二ノ三ノ六 吉野源三郎

〔病氣見舞い〕

〇三〇 一九七〇年一月一日

賀正 一九七〇年正月

昨年の暮に感冒にやられ一月近くを病床で、文字どおり呻吟しました。昨今漸く回復、やや常態に帰りました。一度、お目にかかって——と存じながら御無沙汰をつゞけていますが、徐々にお元氣の御様子、何よりと存じます。いずれ拜眉の折り万々。

吉野源三郎

(113) 東京都文京区本駒込二ノ三ノ六

〔葉書表〕武蔵野市吉祥寺東町二丁目四四ノ五 丸山眞男様〈昭45〉

〔賀状〕

〇三一 一九七一年一月一日

明けまして おめでとうございます 一九七一年正月

旧臘お目にかかりましたあと、また、お疲れだったのに——と、長

話が悔やまれました。

今年はなんとかして元氣を回復し、元氣な顔でお目にかかりたいと思っています。未来への展望が少しでも開けてくれたら——と考えていますけれど。

吉野源三郎

113 東京都文京区本駒込二ノ三ノ六

〔葉書表〕180 武蔵野市吉祥寺東町二丁目四四ノ五 丸山眞男様

〔賀状〕

〇三三 一九七二年一月一日

明けまして おめでとうございます 一九七二年正月

いつでもお目にかゝれると思うばかりにいつその機を失い、いつのまにか御無沙汰のまま一年たってしまいました。

御健康の回復と共に今年がお仕事にとって実りの多い年になるよう

蔭ながら祈念しています。家内からも御講義に対する御礼を申しあげてくれとのことです。

吉野源三郎

113 東京都文京区本駒込二ノ三ノ六

〔葉書表〕武蔵野市吉祥寺東町二丁目四一ノ五 丸山眞男様〈昭47〉

〔賀状〕

〇「御講義に対する御礼」は、吉野夫人の吉野智重子がみすずセミナー「幕末・維

新の政治と思想——福沢論吉研究（一九七一年一月）に参加聴講したことを指すと思われる。

〇三三 一九七三年二月二二日

御礼がおくれましたが『歴史思想集』確かに頂戴しました。お目にかゝる機会を得てと考えつゝ、遷延、悪しからずお宥し下さい。浅見君を通じ、御様子、その折り折りに承っています、くれぐれも御自愛下さいませよう。「歴史意識の古層」は波多野先生の「時と永遠」を思い出しながら拝読しました。

〔葉書表〕 武蔵野市吉祥寺東町二ノ四四ノ五 丸山眞男様

二月十二日 文京区本駒込二ノ三ノ六 吉野源三郎 〈昭48〉

〔著書寄贈への礼状〕

○『歴史思想集』は『日本の思想』六「歴史思想集」（筑摩書房）、「歴史意識の「古層」」はその解説。

〇三四 一九七五年一月一日

明けまして おめでどう存じます 一九七五年正月

王安石

吾心童稚時 不見一物好
意言有妙理 独恨知不早
初聞守善死 頗復吝肝腦

中稍歴艱危 悟身非所保
猶然謂俗学 有指当窮討
晚知童稚心 自足可忘老

113 東京都文京区本駒込二ノ三ノ六

吉野源三郎

〔葉書表〕 180 武蔵野市吉祥寺東町二丁目四四ノ五 丸山眞男様

〔賀状〕

〇三五 一九七九年一月三日

丸山眞男様

一九七九年十二月三日

吉野源三郎

先週の金曜日、あのように思いがけずお目にかかる機会を得、私としては病中病後こんなうれしかったことはなかったのですけれど、お急がしい中で五分間を割いて——という当初のお約束を反故にしてしまい、あれほど長い時間をあんなことで占領し、あとになってからとんだことをしてしまったと悔んでも追いつきませんでした。お仕事がいまどんな状況にあるかを伺っているながらこのような始末、お詫びのしようもありません。栗田君が同席していなかっただなら、もう少し分別がきいたのでしょうか、栗田君の顔には代々木が重なって眼に映るものですか、何か黙っていられないものが胸に動き出して来るのです。そしてつい羽目をはずしてしまいます。それに最近、『前衛』で、

河上さんの生誕百年記念事業に関連して、河上さんが政治活動から身を引いたあの行動に触れ、これを批判し、除名処分が当然だと言っているのを読んだばかりでした。「なんじらのうち罪なきもの、まず石を擲て」という聖書の文句が思い出され、パリサイ人が今も跡を絶たないことを知りました。公党として止むをえなかつたとしても、今日、それを論じるには論じようもあり、言いようもあるはず、河上さんのあの献身は一体誰がこれを受けとめているのかと感ぜました。——しかし、こんなこと、あなたのお邪魔をしたことに対する言いわけにはなりません。お宥し下さい。

一病気で引籠ってからもう二年になろうとしています。終年無客長閑閑というやつで、殆んどどなたにもお会いしませんでした。それで二年ぶりでお目にかゝるとちよつと堰が切れたように溢れ出ます。元来、王維のように終日無心長自^ラ閑^{タリ}とはいけない性分で、こんな中でも時々思い起すのは栗本鋤雲の詩の「誰憐孤帳寒檠下、白髮遺臣讀楚辭」という句です。戦争中、新宿花園神社の近くの尾佐竹先生のお宅で先生にお会いしていたとき、先生は、日本の右傾がとうとうここまで来たことに対する感懐を洩らして、近頃では長年やって来た明治維新の研究でも、もう志士のことよりは幕府方の遺臣の心事に惹かれるといった、暗くした電燈の下で右の二句を誦して淋しそうに笑われました。今日になってみると、私などもいつのまにか白髮遺臣になっているようです。そして、私なりに「楚辭」を読みかえしているようなわけです。

いずれお仕事がひと片づきしましたら、また暇を見てお目にかゝりたく存じます。とりあえず先週金曜日のお詫びまで。乱筆乱文お目こぼし願います。以上

〔封筒表〕180 武蔵野市吉祥寺東町二ノ四四ノ五

丸山眞男様 玉机下

〔封筒裏〕緘 一九七九年十二月三日

113 東京都文京区本駒込二ノ三ノ六 吉野源三郎

〔1979 年〕昭54.12.3. 心境

○「尾佐竹先生」は尾佐竹猛。

〇三六 一九八〇年四月二一日

丸山眞男様

一九八〇年四月二十一日

吉野源三郎

春になりながらいつまでも冷気が去らず私などたいへん体にこたえておりますけれど、お障りなく御過ごしでしょうか。四月一日には、岩波書店で図らずもお目にかゝり、うれしく存じました。その後まもなく日本思想大系の抜刷をお送り頂きありがとうございます。実はその御礼の手紙を書いておりますとき吉川幸次郎さんのお逝りになった知らせがあり、中絶。思いながら今日まで御挨拶がのびてしまいました。

御承知のとおり、日本思想大系をやるとうという話が起りましたとき、

岩波としてはその決心いたしましたもの、在来の類書に比べて、どのような特色を備え、どのような点で抜きん出ることができているのか、その性格についても、私には素養のない悲しさ、はつきりとした見通しがつきませんでした。そのために、家永さん、井上光貞さん、尾藤さんなど、後に編集委員をお引受け願った方々に御相談するに先立ち、特に以上の疑点に関して幾度も御意見を伺い、また、お話し合いを重ねて頂いたのが、ほかでもない丸山さんと吉川さんのお二人でした。あの当時のことを、抜刷を頂戴して思い出していたところへ、吉川さんの訃報でしたから、本当に愕然としました。実は昨年中国旅行から帰って来られた後御病気だと聞き、つゞいて手術されたことを知らされ、吉川さんのこと一時はひどく心配に存じていましたが、その後手術後の経過が極めて順潮とのことで安神し、それよりも、日本思想大系のための無理がたたって二度も入院された丸山さんの方が心配だなどと浅見君たちと話してしまっていたのに、殆んど突然と行ってよいほどの急変で吉川さんがなくなられたのでした。なくなる前日には、見舞いに来られた生島さんと元気に話しておられたとか。——この一、二年に、戦後仕事の上で近くして頂いた同世代の学者、思想家のなくなることが相次ぎ、月並みな言い方ですが寂寥の感が身にしみます。吉川さんのようなかけがえのない学者、強烈な個性をもった人物の場合には、なくなられたあとの寂寞はちよつと埋めようがありません。それにつけても、丸山さんの御自愛を切望せずにはいられません。これからは少々我儘をなさつても結構、御自分のこれからの一生、で

きる限り御自分の満足のゆきますよう遠慮なしにやっついて頂きたいと思えます。それが多勢の人の喜びになること、まちがいないのですから。
私ももう少し健康を取戻したいと思っています。そしてもう少し元気になって、いろいろお話を伺いたいと考えています。いずれまた、拝眉のおりに万々。

〔封筒表〕 180 武蔵野市吉祥寺東町二ノ四四ノ五 丸山眞男様

〔封筒裏〕 封 一九八〇年四月二十一日

113 東京都文京区本駒込 二ノ三ノ六 吉野源三郎

〔昭55.4.21. 吉川幸次郎氏訃報に接して所感〕

○「日本思想大系の抜刷」は「闇齋学と闇齋学派」(『日本思想大系三』山崎闇齋学派)(岩波書店)の解説)のこと。○「生島さん」は生島遼一。

収録書簡一覧

- 1 1950年12月29日 〈病気見舞〉
- 2 1951年2月13日 〈見舞・経済的援助〉
- 3 1951年3月29日 〈Pacific Affairs 寄稿の件〉
- 4 1951年10月3日 〈(「世界」の反響)〉
- 5 1951年11月24日 〈宮前町の家売却の件〉
- 6 1953年9月4日 〈「世界」連続座談会御礼〉
- 7 1956年3月30日 〈座談会礼、「現代思想」構想〉
- 8 1957年2月5日 〈若い学者紹介依頼〉
- 9 1957年10月 [訪問先の中国から]
- 10 1958年6月20日 〈京都の会員につき猪木氏と〉
- 11 1958年8月7日 〈緑川君持参 中東動乱について、座談会〉
- 12 1958年9月4日 〈レーヴィットをかこむ会〉
- 13 1959年1月26日 〈思想コモンの人選増加について〉
- 14 1959年7月13日 〈平談会解散論の前後策〉
- 15 1959年7月27日 〈平談会解散論集りの報告〉
- 16 1959年9月2日 〈安保改定特集 安倍さん自叙伝問題〉
- 17 1959年12月2日 [京都平和問題談話会の声明文について]
- 18 1960年4月13日 〈大学院学生への風樹会援助〉
- 19 1961年1月13日 〈平談会解散論の件、京都の模様〉
- 20 1961年8月29日 [近頃の心境]
- 21 1962年12月8日 [賀状]
- 22 1963年4月18日 〈羽田に迎えにいられなかった事への挨拶〉
- 23 1964年5月8日 〈講座「現代」〉
- 24 1964年6月5日 [著書寄贈への礼状]
- 25 1964年9月8日 〈ラッセル平和財団日本協力委員会結成の相談〉
- 26 1965年1月1日 [賀状]
- 27 1965年7月9日 〈ヴェトナム北爆とラッセルの立場〉
- 28 1967年7月31日 [軽井沢から]
- 29 1969年4月21日 [病気見舞い]
- 30 1970年1月1日 [賀状]
- 31 1971年1月1日 [賀状]
- 32 1972年1月1日 [賀状]
- 33 1973年2月12日 [著書寄贈への礼状]
- 34 1975年1月1日 [賀状]
- 35 1979年12月3日 〈心境〉
- 36 1980年4月21日 〈吉川幸次郎氏訃報に接して所感〉